国際シンポジウム「国際日本学の構築に向けて」発表要旨

International Symposium

“Towards a Construction of International Japanese Studies”

Program*

主催
東京外国語大学国際日本研究センター
hosted by International Center for Japanese Studies
Tokyo University of Foreign Studies,TUFS

2012 年 3 月 23 日（金)、24 日（土）
東京外国語大学府中キャンパス
アゴラグローバル 1F　プロメテウスホール
Friday 23　and Saturday 24 March, 2012
Prometheus Hall, Agora Global Bldg.,
Fuchu campus, Tokyo University of Foreign Studies

*Abstracts are written in Japanese only

東京外国語大学国際日本研究センター　主催
国際シンポジウム　「国際日本研究の構築へ向けて」　プログラム

日時:2012年3月23日(金)、24日(土)　10:00～17:00
会場:東京外国語大学府中キャンパス　アゴラグローバル「プロメテウスホール」
総合司会:(23日)林佳世子、(24日)川口健一

■3月23日（金）■

9:30 ～	（受付開始）		
10:00 ～ 10:15	開会挨拶	東京外国語大学学長	亀山郁夫
		東京外国語大学理事	宮崎恒二
10:15 ～ 10:25	開催趣旨	国際日本研究センター	センター長　野本京子

セッション１）日本語教育における「日本学」　（司会：小林幸江）　（※報告はおよそ20分+Q&A10分）

10:25 ～ 10:55	「俳句による日本語・日本文化教育の実践」	菅長理恵(東京外国語大学）日本
10:55 ～ 11:25	「タマサート大学の日本語教育における『日本学』」	ｳｨｰﾗﾜﾝ･ﾜｼﾗﾃﾞｨﾛｸ（ﾀﾏｻｰﾄ大学）タイ
11:40 ～ 12:10	「台湾における日本研究の現状と展望 －政治大学を中心に－」	于乃明（国立政治大学）台湾
12:10 ～ 12:40	「韓国における日本文学教育の現況と展望」	金鍾徳（韓国外国語大学校）韓国
12:40 ～ 13:10	セッション総括	

セッション２）日本学の方法論をめぐって：比較対照の観点から　（司会：谷口龍子）

14:10 ～ 14:40	「研究成果と日本語教育の応用について ―依頼という言語行為の日中対照研究を例に―」	趙華敏（北京大学）中国
14:40 ～ 15:10	「〈他者〉と対話する可能性を求めて ―台湾東海大学における日本研究への模索」	蕭幸君（東海大学）台湾
15:30 ～ 16:00	「『紅楼夢』と『源氏物語』における女性像 －林黛玉と紫の上を中心にして－」	陳明姿（国立台湾大学）台湾
16:00 ～ 16:30	「日本学の方法論をめぐって ―コーパス構築の視点から―」	徐一平（北京外国語大学）中国
16:30 ～ 17:00	セッション総括	
（18:00 ～ 20:00）	**懇親会**	

■3月24日（土）■

9:30 ～	（受付開始）	

セッション３）デジタルネットワークと日本語・日本学　（司会：友常勉）

10:00 ～ 10:30	「日本語のレベルに応じたeラーニング教材と 教室授業との組み合わせ」	藤村知子（東京外国語大学）日本
10:30 ～ 11:00	「日本語教育におけるe-Learning実践と 日本語学習コンテンツ」	尹鎬淑（サイバー韓国外国語大学校）韓国
11:15 ～ 11:45	「日本語・中国語遠隔協働授業の実践」	林俊成（東京外国語大学）日本
11:45 ～ 12:15	セッション総括	

セッション４）移動と定着を巡る日本 ―紐帯としての日本語―　（司会：前田達朗）

13:15 ～ 13:45	「南米ボリビアにおける沖縄系移民の言語生活」（仮）	白岩広行　（大阪大学）日本
13:45 ～ 14:15	「『つながる日本』から『国際化する日本』へ －ﾘｵﾃﾞｼﾞｬﾈｲﾛの日本語人からみる日本語･日本文化の紐帯力」（仮）	ｷﾀﾊﾗ高野聡美（ﾘｵﾃﾞｼﾞｬﾈｲﾛ州立大学）ﾌﾞﾗｼﾞﾙ
14:30 ～ 15:00	「在外韓国人社会における言語の実態調査をめぐって ―共通韓国語の構築のために―」	任榮哲（中央大学校）韓国
15:00 ～ 15:30	セッション総括	
15:30 ～ 16:30	**全体討論**	
16:30	**閉会の辞**	

Program "The 2nd International Symposium: "Towards a Construction of International Japanese Studies"
hosted by International Center for Japanese Studies Tokyo University of Foreign Studies,TUFS

Date: Friday, 23 - Saturday, 24 March 2012, 10:00-17:00
Venue: Prometheus Hall, Agora Global Bldg., TUFS Fuchu campus

■Friday, 23 March 2012■

9:30 - **Registration Starts**

10:00 - 10:15 **Welcome Speeches**
Ikuo KAMEYAMA (President, Tokyo University of Foreign Studies)
Koji MIYAZAKI (Executive Director, Tokyo University of Foreign Studies)

10:15 - 10:25 **Conference Purpose**
Kyoko NOMOTO (Director, International Center of Japanese Studies)

Session 1) 'Japanology' in International Japanese Education

10:25 - 10:55 *"Education for Japanese Language and Japanese Culture through Haiku"*
Rie SUGANAGA (Tokyo University of Foreign Studies) JAPAN

10:55 - 11:25 *"Japanology in Japanese Language Education at Thammasat University"*
Weerawan WASHIRADILOK (Thammasat University) THAILAND

11:40 - 12:10 *"Current Situation and Progress of Japanology in Taiwan"*
NaiMing YU (National Chengchi University) TAIWAN

12:10 - 12:40 *"Current Situation and Prospects of Education for Japanese Literature in Korea"*
JongDuck KIM (Hankuk University of Foreign Studies) KOREA

12:40 - 13:10 **Session Concluding**

Session 2) On the Methodology of Japanology: From the View Point of Comparisons and Contrasts

14:10 - 14:40 *"Application of Research Accomplishments for Japanese language Education"*
HuaMin ZHAO (Peking University) CHINA

14:40 - 15:10 *"Seeking for the Possibility of Dialogue with Other: Challenges for Japanese Studies in Tunghai University"*
HsingChun HSIAO (Tunghai University) TAIWAN

15:30 - 16:00 *"Comparison of Japanese Classic Literature (Tale of Genji etc.) with Chinese Literature"*
MungTzu CHEN (National Taiwan University) TAIWAN

16:00 - 16:30 *"On the Methodology of Japanology: Based on the Viewpoint of Constructing Corpus"*
YiPing XU (Beijing Foreign Studies University) CHINA

16:30 - 17:00 **Session Concluding**

(18:00 - 20:00 Evening reception)

■Saturday, 24 March 2012■

9:30 - **Registration Starts**

Session 3) Japanese Language Education and Japanology in Digital Networking Society

10:00 - 10:30 *"Combination of e-learning materials and Class Practices based on the Evaluation Levels of Japanese Language"*
Tomoko FUJIMURA (Tokyo University of Foreign Studies) JAPAN

10:30 - 11:00 *"Practices of e-learning and Educational Content for Japanese"*
HoSook YOUN (Cyber Hankuk University of Foreign Studies) KOREA

11:15 - 11:45 *"Practices of Remote-Collaborative Lessons between Japanese and Chinese"*
SyuSei LIN (Tokyo University of Foreign Studies) JAPAN

11:45 - 12:15 **Session Concluding**

Session 4) Examining Japan by focusing on the aspects of Mobility and Stability: Japanese Language as Networking ties

13:15 - 13:45 *"Language –Life of Okinawan Emigrants in Bolivia"*
Hiroyuki SHIRAIWA (Osaka University) JAPAN

13:45 - 14:15 *"Empowering band of Japanese Language: Japanese-speakers in Rio De Janeiro"*
Satomi T.KITAHARA (Rio de Janeiro State University) BRAZIL

14:30 - 15:00 *"Examining the Language Research of Overseas Koreans : For the Construction of Common Korean Language"* YoungCheol YIM (Chung-ang University) KOREA

15:00 - 15:30 **Session Concluding**

15:30 - 16:30 **Discussion**

16:30 **Closing Speech**

発表要旨

俳句による日本語・日本文化教育の実践

東京外国語大学　留学生日本語教育センター 准教授
菅長　理恵

日本語教育の現場で俳句を扱うことには、以下の三つの側面がある。

一、言語的側面
二、言語文化的側面
三、表現タスク

俳句の五・七・五ルールは、日本語がモーラ言語として拍という特徴を持つことを明確にする。季語の使用というルールは、日本文学の歴史的背景および日本の風土と切り離すことはできない。また、俳句作品に触れることで日本人のものの感じ方、考え方を知ることができる。さらに、俳句を作るもしくは鑑賞するというタスクは、自己表現としての意義を持つと同時に、活発な意見交換の場を形成する。

これらの三つの側面を学生の日本語レベル、興味感心やニーズに合わせて適切に組み合わせることによって、活発な日本語活動をうながすことが可能である。

発表では、菅長が担当する様々な日本語プログラム（学部進学留学生予備教育・短期留学生全学日本語プログラム・日本語日本文化研修留学生プログラム・ショートステイプロラム・学部総合科目）での実践例を紹介し、俳句による日本語・日本文化教育の可能性の広がりを提示する。

タマサート大学の日本語教育における「日本学」

タイ　タマサート大学　日本語学科　副教授
ウィーラワン　ワシラディロク

タマサート大学日本語学科における日本語教育では、高度な日本語能力と共に日本に関する知識を身につけた人材の育成を目指している。しかし、現状では、初級から上級までの日本語の 4 技能を身につけさせる語学を重視しており、日本学は主に日本全体を知るための基礎知識が教えられているに過ぎない。

ここでは、本学の日本学科目の一つである「日本の社会と文化」における日本の歴史の扱い方を紹介する。日本の歴史を原始、古代、中世、近世、近代、現代の 6 時代に分け、各時代の主な出来事や変化を見ながら、学生に各時代の特徴をつかませる。同時に、タイの歴史と比較することで、日本の歴史をよりわかりやすく伝えている。その結果、タイの学生の日本に対するイメージが変わったり、積極的に日本のことを考えたりするようになっている。

今後はこのような日本に関する知識を生かすために、日本学の科目で習った内容を日本語学の科目でも取り上げるような授業が必要だと考える。

台湾における日本研究の現状と展望－政治大学を中心に－

台湾　国立政治大学　日本語学科教授兼外国語文学院院長（学部長）
于　乃明

この十数年、台湾における日本研究を取り巻く状況が少しずつ変わってきた。たとえば、その端的な例を、日本語学科の学生の動向から窺うことができる。もともとカリキュラムには、日本語、日本文学以外にも、日本の歴史、文化、或いは日本の社会、政治、経済など多様な選択科目が設けられていた。ところが、少子化、不景気の影響を受けて、就職が困難になってきた現実を目の当たりにして、日本語学科の学生も、ダブルメジャー、或いは副専攻として、ほかの学科の授業も意識的に履修するようになった。ほかの学科の学生もまた同じように、自分の専攻以外に、日本語をダブルメジャーか、副専攻として勉強するようになってきている。日本語学科の学生が特に関心を持つ科目は、就職を念頭に置いてであろうが、経営学、会計学、国際貿易、マスコミ学、外交、歴史などである。

また、学問的領域を越えて、様々な学部が共同で特別な日本研究のコースを開設する傾向も見える。例えば、商学部、法学部、日本語学科、社会科学学部、国際関係学部の共同企画で、日本研究に関する特別なコースを提供している。それは、もはや日本語学科や特定の学科だけの時間割では、学生及び社会のニーズに応じきれなくなっているからである。

そして、実際の必要性もあって、（日本）国際交流基金の援助により、台湾では北部から南部まで、六つの大学の中に日本研究センターが設立されている。

例えば：台湾大学では、日本及び韓国研究センター、
政治大学では、日本研究センター、
台湾師範大学では、日本研究センター、
中興大学では、日本総合研究センター、
東海大学では、学際的複合日本地域研究センター、
中山大学では、日本研究センターなどである。

もう一つ日本研究とも関連性がある活動がある。それは、東アジア、特に中国、台湾、日本、韓国、ホンコンの学者が集まり、一つのテーマについて、共同で会議を開き、討論したり、研究をしたりというかたちの活動である。取り上げられているテーマは、例えば「文化的クリエイティブ産業(Culture Creative Industry)」、自然災害、エコロジー、省エネルギーなどについてである。

日本研究の内容は、時代の変化に応じて、多元化、多様化し、より深くなっている。それが、ここ十数年の顕著な動向であり、今後の展開にも影響すると考えられる。

韓国における日本文学教育の現況と展望

韓国外国語大学校 日本語大學 教授
金　鍾徳

近年韓国の大学は学部制と人文学危機の中で、科学技術と実用学問を重視する社会のパラダイムシフトに対応できず、厳しい環境に置かれている。韓国における大学の日本語関連学科は 80 年代から 90 年代にかけて地道に増え続け、日本語・日本文学の教育と研究は質量ともに目覚しい発展を遂げてきた。そこでこの報告では、韓国の大学における日本文学教育の目標と実態、これからの展望について考えてみたい。日本文学の教育は研究者個人の興味や専門分野によって授業で取り上げる作者・作品の頻度数も影響されるといえよう。そこで、韓国での日本文学の研究論文と大学のカリキュラムなどを調べ、日本文学教育の実態と展望を分析したいと思う。また韓国外大日本語科は 2009 年から日本語大学日本学部となり、二年生の時に専攻を選択する学部制となったので、その教育課程と日本文学教育の実態などについても報告したい。

セッション２）日本学の方法論をめぐって：比較対照の観点から　＜3 月 23 日(金)＞

研究成果と日本語教育の応用について
―依頼という言語行為の日中対照研究を例に―

中国　北京大学　外国語学院副院長、教授
趙　華敏

日本語学習者にとって、日本語を使って、日本語母語話者とスムーズにコミュニケーションを行うことは大変難しいことである。それは、言葉そのものより発想の相違によるところが大きいからであろう。言葉は日本語になっているが、話し方が母語の発想の影響を受けているため聞き手に違和感を与えてしまい、スムーズに事をなすのにマイナスの影響をもたらす結果になったりもする。

本発表は語用論の立場から中日の依頼という言語行為の発話機能と価値づけについて観察し、分析する。その結果、中日の依頼という発話行為はいずれも〔事象描写〕〔可能要求〕〔感情表出〕からなるが、中国語では〔感情表出〕が「付加成分」であり、日本語では「必須成分」であることがわかった。そして先行研究で指摘された中国語の依頼は「依頼」と「要求」が隣接し、日本語は「依頼」と「希求」、「懇願」が隣接していることを改めて実証した。スムーズにコミュニケーションを行うには母語の発想の影響をもっと重要視し、研究成果を積極的に日本語教育に取り入れるようアピールする。

〈他者〉と対話する可能性を求めて
―台湾東海大学における日本研究への模索

台湾　東海大学　日本語文学系　助理教授
蕭　幸君

ここ一、二年台湾での日本研究は大きな動きを見せている。各地の大学にさまざまな形で日本研究機構が設立され、規模からいっても視点の置き方からいってもかつてないほどの豊穣ぶりを見せ始めている。これまで語学･文学／経済･政治といった形で棲み分けの観を呈していた台湾の日本研究は、これらを統括できる拠点が立ち上げられることによって、研究分野や主題区分によってこぼれ落ちてしまいがちだった様々な重要な研究視点が掬い上げられ、より力強く発信していくことができる。その点においても、その設立は大きな意味を持つ。一方、これらの拠点と連携し、研究協力のできるパートナーシップをいかに発揮していくかが研究に携わる者にとって重要な課題となる。報告者自身が勤めている台湾東海大学の日本語言文化学系でも 2011 年に日本研究センターを設立し､研究活動を始めている。今回は、こうした変化に伴い、本学系における研究活動の動きを踏まえたうえで、報告者自身が関わっている教育現場からいくつかの教育実践について報告する。特に、本学系が目標として掲げている「多元文化交流」のなかでも重要視されている〈他者〉と対話する可能性の模索がどのような役割を果たしているかを中心に話を進めることにする。

『紅楼夢』と『源氏物語』における女性像
－林黛玉と紫の上を中心にして－

台湾　国立台湾大学　日本語学科主任教授
陳　明姿

『紅楼夢』と『源氏物語』はそれぞれ中国と日本においてもっとも広く愛読されている古典の長編恋愛小説である。現在刊行されている『紅楼夢』は十八世紀に曹雪芹と高鶚によって書かれた小説で、『源氏物語』は十一世紀の初頭に後宮の女房紫式部によって書かれた物語である。両者の成立年代は七百年以上も隔たっているが、多くの類似点が見受けられる。両作品は単にともに貴族社会を背景に描き上げた恋物語ばかりでなく、作者達には、ともに人間の情欲、宿命をつきとめようとする試みが見受けられる。又、両者の創作動機も著しく類似している。曹雪芹は作品の冒頭で自分の創作動機を語る際、すでにこの物語は「フィクション」であることを打ち明けている。又、今の自分がおちぶれているが、以前自分のまわりにいた立派な女性たちをそのまま埋もれさせたくない。そのゆえフィクションの物語によってそれらの女性の事蹟を後世に伝えたいという。女性を書くのは『紅楼夢』では重要なモチーフの一つであることが明らかである。一方､『源氏物語』の作者も「蛍」の巻で、主人公源氏をして、作り物語が虚構を持っているという。そして、作者の式部も女性であるためか、作品の中で多くの女性が描かれ、特に第二部は「女性の生き方」を主題とする語りだと言える。

両作品の中で、ともに女性が重要な位置を占めていることは明白である。そのゆえに両国の文学における女性像を探求するには、この二つの作品を抜きにすることは出来ない。そのため、今度は日中両国の文学における女性像を研究する一環として、特に作品の中でもっとも主人公に愛され、読者達の心を引き付ける林黛玉と紫の上に焦点を当て、両者の異同を考察し、両女主人公の人物造形、作者の意図、ひいては両文学の女性像の異同を試みに考察しようとするものである。

日本学の方法論をめぐって　―コーパス構築の視点から―

北京外国語大学教授、北京日本学研究センター　センター長
徐　一平

20 世紀 90 年代から、コンピューター・テクノロジーの飛躍的な発展により、自然科学はもとより、人文科学の諸分野でも思考革新や手段更新が急速に進んできている。自然科学に近いと言われる言語研究の分野においては、コンピューター・コーパスによる新しい言語研究の方法、つまりコーパス言語学がついに言語学界に認められ、数多くの研究者に愛用されるようになり、21 世紀の言語研究はコーパス言語学抜きでは語れないという現象さえ生まれてきているのである。そして、多くの研究者の努力により、大型コーパスも次々と完成されている。

単一言語のコーパスが開発されている中、二言語対訳あるいは多言語対訳のパラレルコーパスも、コーパスの開発に従って注目されてきている。しかし、現在開発されている対訳パラレルコーパスは、どの国においても英語との対訳パラレルコーパスで、日本語と中国語の対訳コーパスは未だに稀有に近い状態である。その状況の中で、北京日本学研究センターは『中日対訳コーパス』を開発してきた。

（一）汎用性を重んじた内容構成 、（二）中日通用型の同窓モニターとアラインメント、（三）適宜な情報付与を施した加工型コーパス、（四）多様な情報処理機能を持つ知能型コーパス 。

書き言葉コーパスの構築は終結の段階に近づいていた。話し言葉コーパスの構築は重要視されつつある。その原因としては、話し言葉の研究、音声処理の研究（音声認識、音声の合成）、外国語としての日本語教育の研究（発音の指導、会話の指導）などの深化によると考えられる。現在、北京日本学研究センターでは『日本語講演コーパス』を新たに構築している。このコーパスの完成により、日本語の話し言葉の研究、中国母語話者の日本語話言葉の研究、日本語音声研究、音声処理の研究のいずれにも大きく貢献できると信じている。

今後の日本学研究は、より学際的な研究、或いは国際的な研究が要求される時代になると思われる。このコーパス言語学を通しての日本語・中国語の対照研究は、日本語学研究者だけでなく、翻訳研究者、コンピューター自然言語処理研究者、言語工学研究者などが協力して、初めて出来る研究である。

日本語のレベルに応じたｅラーニング教材と教室授業との組み合わせ

東京外国語大学　留学生日本語教育センター　教授
藤村　知子

本学留学生日本語教育センターがコンテンツを提供して開発しているｅラーニング教材 JPLANG は、日本の大学での勉学に必要なアカデミック・ジャパニーズの習得を目指し、初級から上級まで一貫した教材を提供している。日本語のレベルに応じて、使用する機能も異なり、初級は言語要素の習得を中心に、上級は日本人学生と外国人学生の共同学習、「IJ 共学」に利用できる素材の提供が中心となっている。その効果的な利用法について論じたい。

日本語教育における e-Learning 実践と日本語学習コンテンツ

韓国　サイバー韓国外国語大学校　教授、対外協力部長
尹　鎬淑

韓国の日本語学習者数は、2009 年現在約 96 万名に達しており、世界で最も日本語教育が活発な国であると評価されている。しかし、韓国での日本語教育は、量的な側面からは目を見張るような発展があったが、教育方法などの質的な面については、依然として講義室という限られた空間で、教材中心の一方的な教育方法であるという問題点が指摘されている。

一方、最近、韓国社会におけるインターネットの一般化、スマートフォンの大衆化という社会的インフラの構築により、既存のオフラインにおける日本語の学習スタイルとまったく異なったレベルでのサイバー上の講義、双方向性のあるビデオチャットの講義などオンライン上にある学習スタイルの出現で、日本語学習者たちに時間と空間を越えた日本語学習の機会を提供するようになった。

本発表では、サイバー大学の『日本語入門』コンテンツを使った授業の実践と学習コンテンツを検討して、韓国における日本語教育の発展の可能性を探りたい。

日本語・中国語遠隔協働授業の実践

東京外国語大学　大学院総合国際学研究院 教授
林　俊成

高性能な通信環境を背景に、ネットワーク上で遠隔地を結んで講義を行う環境が整えられ、外国語学習においても在外のネイティブ話者から直接講義を受けることも可能となった。中でも CSCL を中心に、コンピュータ・ネットワークを介して学習者間のコミュニケーションを密接に行う協調学習も盛んに行われ、より実態に近い学習環境の下で実践的な学習を行うことが容易に出来るようになっている。われわれは、このマルチメディア語学学習環境の特性を最大限に活かす中日遠隔協働授業を実施してきた。この授業は、学生自らがネイティブな言語を駆使して相手の学習を助け、学生どうしで相互に討論会を行うと共に、1 対 1 コミュニケーションを実施し、さらに会話内容のディクテーション、見直しなどの作業をおこなうことによって構成されている。

本講義の特徴としては、討論を行う学生が講義の主役となり、その経験を共有して、お互いの学習言語を共学する点が挙げられる。具体的には、台湾の大学の日本語専攻学生と日本の大学の中国語専攻学生とで同じ時間帯に講義を開催し、共通のカリキュラムでの討論会や言語活動などを実施した。ここでは、この中日遠隔協働授業の実施にあたっての環境の説明を行い、活動内容の説明を行う。また、このようなタイプの講義の問題点を提起し、皆さんとの情報共有と意見交換になれればと願う。

セッション４）移動と定着を巡る日本 ―紐帯としての日本語―　＜3 月 24 日(土)＞

南米ボリビアにおける沖縄系移民の言語生活（仮）

大阪大学　大学院文学研究科　日本語学講座　助教
白岩　広行

本発表では、南米ボリビアのオキナワ移住地を対象として、当地の沖縄系移民をめぐる言語状況、および当地の「日本語」の言語的特徴を報告する。日本語・スペイン語のほかに沖縄方言も加えた 3 言語接触という視点から、これまで報告の少なかった当地の言語生活を描きたい。

ボリビアのオキナワ移住地は戦後の集団移民によって形成されたコミュニティであり、現在は現地人を雇っての大規模な農場経営がおこなわれている。沖縄方言は世代が下るごとに使われなくなるが、日本語は 3 世でもかなりよく維持されており、日本語とスペイン語のバイリンガルな状況が持続している。これは、日本国籍の維持など、彼らの生活戦術とも関わっている可能性が考えられる。

「つながる日本」から「国際化する日本」へ

－リオデジャネイロの日本語人からみる日本語・日本文化の紐帯力－

ブラジル　リオデジャネイロ州立大学　文学部准教授
キタハラ　高野　聡美

本研究は、参加型観察とライフヒストリーインタビュー記録および文献史料調査に基づくものである。最初に日本学の一分野として移民をめぐる研究を取り上げる意味とその重要性、新たなパラダイムの可能性についてブラジルを念頭に考察する。その中で、日本語・日本文化の紐帯力を考える上で、リオデジャネイロに着目する。その理由は、ブラジルの他の地域に比べ日本人、日系人、日本語人間の交流が多いこと、長期にわたる日伯ナショナルプロジェクトが存在したこと、さらに日本やアジアに進出するブラジル企業本社が立地することなどから、かつての「つながる日本」と「国際化する日本」の二つが混在する地であるためである。さらに、日本語・日本文化が紐帯となり、継続していく条件を考察する。この中で特に日本語人に注目することで、日本学への新たな視点、ヒントが見えてくるのではないか。かつて移住者を受け入れたブラジル文化と日本文化が融合し解釈されてきて、その先に新たに現代の日本文化がどのように再解釈され、あらたな日本文化として発信されているのかを知るのが重要なのではないかと思われる。そこに日本語、日本文化の未来が見える。今日本語、日本文化の真の紐帯力が問われている。

在外韓国人社会における言語の実態調査をめぐって

―「共通韓国語」の構築のために―

韓国　中央大学校 文化大学 日語日文学科教授
任　榮哲

韓国外交通商部の「在外同胞現況」によれば、2010 年 12 月現在、全世界に散在する韓国人及び韓国系の人々は 7,268,771 人であるという。ところで、彼らはどのような時代的な背景のもとで、どのような歴史的な過程を経て形成されたのか。また彼らの言語生活の実態は、どのようなものであるのか。その実態の把握は非常に重要であり、興味深いテーマである。しかしながら、今までのところ、そうした面での本格的な研究は殆んどされていないようである。

そこで、本発表では、今まで行われてきた在外韓国人の言語生活に関する先行研究について顧みる。そして今後、５ヶ年に亙って行われる予定の実態調査（中国、米国、独立国家共同体、ブラジル、日本）について概観し、それぞれの言語社会における普遍性と特殊性を明らかにする。